

教師が主体的に学ぶことのできる校内研修

○北田香織（福島大学教職大学院）

1. 研究テーマ設定の理由

校内研修や授業研究に代表される教師同士の学び合いによって得られる気づきなどの「現場の経験」を重視した学びが高度な専門職である教師に求められている（中央教育審議会，2021）。校内研修は学校の中で行われる研修のことであり，教師の指導力向上のために，それぞれの学校で計画を立てて実施されるものである。中留（1988）は，校内研修を校内の全教職員が共通のテーマ（主題）を解決課題として設置し，学校全体として計画的・組織的・科学的に解決していく実践の過程であり，教職員一人ひとりの専門性に裏づけられた力量を伸ばすものと定義づけた。校内研修で行われる研修は，日々の授業などにその成果が反省されやすく，教師自身が学びの成果を実感しやすいなど，教師の学ぶモチベーションに沿ったものとされている（中央教育審議会，2015）。しかし，片桐（2020）が行った校内研修の課題に関する調査結果では，「研究授業・協議会」，「モチベーション」などに関わる課題が多く見られた。このことから，筆者は現状の校内研修には教師が主体的に学ぶことを妨げる課題があるのではないかと考えた。校内研修の課題を明らかにし，学校の現状に合わせた校内研修をデザインすることができれば，校内研修を更に充実できると考え，研究テーマを「教師が主体的に学ぶことのできる校内研修」と設定した。

2. 協力校の校内研修の実態

協力校の校内研修の実態を把握するため，研修主任への半構造化インタビュー，教職員への質問紙調査（選択式・記述式併用）とSWOT分析を行った。質問紙調査の内容については，土屋・伊藤・森（2023）を参考に作成した。SWOT分析はマネジメント研修カリキュラム等開発会議（2005）の資料を活用した。各種調査により，協力校が目指す校内研修を「自分の課題に合致している授業研究」，「自分の授業力が向上していると感じ，児童生徒に還元される授業研究」，「教師の良さやスキルを生かすことのできる校内研修」と捉えた。また，校内研修の課題は「指導案作成への不安」，「研究授業参観時の自習体制」，「時間の確保」と捉えた。本実践では，主にこの3点の課題を解決するべく，協力校の校内研修形態や内容を改めて見直し，教師一人一人の課題に応じた自身の指導力や児童に還元できる校内研修を実現するために研修主任と協力して校内研修を計画・運営していくことにした。

3. 実践

（1）研修形態の工夫

課題である「時間の確保」，「研究授業参観時の自習体制」に対応するため，少人数グループでの研究を行うことにした。少人数グループは，集まりやすく，共通認識も図りやすいと考えたためである。自分の興味関心のあるテーマごとにグループ分けを行った。同グループ研修は参加必須，他グループは代表研修のみ参加必須とし，自習回数を精選した。

（2）研修内容の自己選択・自己決定

「指導案作成への不安」を軽減するために、指導案作成の有無や形式についてグループ内の話し合いによって決められるようにした。また、研修内容を授業研究、講義演習など多様性を可とし、教師自らが学び方を決められるようにした。

(3) 協議会の工夫

児童生徒に還元される授業研究や自分の授業力が向上していると感じる授業研究の実現のために協議会を工夫することにした。児童の学びの姿を観察し、見取りを共有することで、本授業が児童生徒にどんな学びを促していたかを理解することや児童の姿から次時の指導を考え直すきっかけにつながると考えた。

4. 質問紙調査と観察結果

研修形態の工夫によって、研修時間に対する負担感は減少した。空き時間に研究授業の相談を行ったり、授業研究に継続して取り組んだりするグループがあった。自習回数は減少したが自習体制に対する負担感に大きな変化は見られなかった。

研修内容の自己選択・自己決定によって、指導案作成の負担感は減少した。自分の興味のある指導案の形式に挑戦したグループや指導案ではなく単元の学習計画表を作成し、児童と教師で共有するグループがあった。

児童の姿から語る協議会の提案によって、児童の姿に着目した授業研究について周知することができた。提案後、児童の姿を共有する協議会を行うグループがあった。共有された児童の見取りを次時に生かそうとする教師の姿が見られた。

5. 研究のまとめ

本研究により、少人数の話し合いを重視したグループ研修が研修時間を確保することや指導案作成への負担感を軽減することがわかった。教師一人一人に選択権や決定権を持たせることが研修に対する意識を高めることにつながるのではないかと考えられる。また、自習回数を精選することが自習体制に関わる負担感を減少させることには必ずしもつながらないということがわかった。研究授業時の見守り体制や研修年間計画の工夫などの手立てが必要だったと考えられる。

(引用文献)

- 1, 片桐功 (2020) 「校内研修・研究の課題調査と課題克服の試み：授業改善リーダーからのアプローチ」『琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻年次報告書』, 4, pp.73-80
- 2, 中央教育審議会「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会(2021)『『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて審議まとめ』, pp.12
- 3, 土屋明子・伊藤裕志・森美香 (2023) 「校内研修コンサルタントの活用による継続的・自律的な校内研修運営のための支援—オーダーメイド型校内研修支援プログラムの作成と試行—」千葉大学教育実践研究, 26, pp.45-54
- 4, マネジメント研修カリキュラム等開発会議(2005)「学校組織マネジメント研修～すべての教職員のために～(モデル・カリキュラム)」, pp.121